

ボーマルシェの『罪ある母』とスタンダール

下 川 茂

序

ボーマルシェの『フィガロの結婚』と、モーツァルトの同名のオペラが『赤と黒』に及ぼした影響については、すでに詳しい分析が松原雅典氏によってなされている¹⁾。したがって、ボーマルシェが『フィガロの結婚』の続編として書いた『罪ある母』と『赤と黒』との間にも、何らかの関連がある可能性は、十分考えられることであった。

しかし、『罪ある母』のスタンダールへの影響を追求した研究はこれまで存在しない。おそらく、その最大の原因は、『罪ある母』が、もともとボーマルシェのフィガロ三部作の中で最も評価が低く、論じられることの少ない作品であったことだろう。第一作『セヴィリヤの理髪師』と第二作『フィガロの結婚』とが、古典喜劇を革新した成功作として現在も高く評価されているのに対して、『罪ある母』は、ボーマルシェ晩年の、力の衰えた失敗作と考えられてきた。最近、ようやく、Béatrice Didier氏が『ボーマルシェあるいはドラマの情熱』²⁾によって、町民劇drame bourgeoisと『罪ある母』の劇的な復権を行ったが、そこでも、スタンダールの作品との関連については全く触れられていない³⁾。

本論文は、これまでスタンダール研究者によって論じられることのなかった『罪ある母』に注目し、スタンダールの二つの小説『赤と黒』と『アルマンス』に対するその影響を明らかにしようとするものである。

1 『罪ある母』と『赤と黒』

『赤と黒』のジュリアンとレナール夫人の恋には、松原氏が明らかにしているように、『フィガロの結婚』のシェリュバンとアルマヴィーヴァ伯爵夫人の恋を下敷きにしている部分がある。しかし、『フィガロの結婚』では、シェリュバンは、誰にでも恋をする、恋を恋する若者であり、伯爵と伯爵夫人、フィガロとシュザンヌの二組のカップルに比べると、彼と伯爵夫人との関係はごく淡いものにとどまっている。一方ジュリアンとレナール夫人は実際に性的関係

を結ぶに至る。ところで、シェリュバンと伯爵夫人の間に、その後実際に姦通事件があり、二人の間にレオンという父親そっくりの息子が誕生していたこと、またシェリュバンが自殺とも言える戦死を遂げていたことが明らかになるのは、続編の『罪ある母』においてである。従って、『罪ある母』のシェリュバンと伯爵夫人が、姦通成立後のジュリアンとレナール夫人のモデルとなっている可能性がある。そこで、二つの作品を突き合わせてみると、確かに、偶然の一致とは思えない類似点がみつかる。

最初に取り上げたいのは、伯爵夫人のシェリュバン宛の手紙である。手紙の中で伯爵夫人は姦通の場面を回想しているが、「なんて無分別なひどい人 Malheureux insensé!」と夫人はシェリュバンに語りかけ、シェリュバンが彼女と関係を結んだ夜のことを、「夜の不意打ち la surprise nocturne」と呼んでいる⁴⁾。ところが、ジュリアンが初めてレナール夫人の部屋に忍んで行くのも夜中であり、夫人もジュリアンに「ひどい人 Malheureux!」と叫ぶ⁵⁾。次に、伯爵との間に生まれた長男の決闘による死を、伯爵夫人はシェリュバンとの姦通に対する神罰とみなし(391)、さらに神の罰が、シェリュバンとの間にできた次男レオンにも及ぶのではないかと神の復讐に怯えるが(392)、レナール夫人も、末子スタニスラスの病気を、ジュリアンとの姦通に対する神罰と考える(107-112)。Didier氏は、上掲の書で、伯爵夫人の信仰に、ラシーヌの『フェードル』の主人公のものと同じジャンセニズムを見ているが⁶⁾、レナール夫人の聴罪司祭シェランはジャンセニストであり、レナール夫人の信仰もジャンセニズムの色濃いものである⁷⁾。伯爵夫人の信心深さが天使のようだとされるのと同じように(angélique-348, ange-356, 357)、レナール夫人の優しさも天使に譬えられる(angélique-43, 86, ange-109)。又、『罪ある母』には、息子的恋人シェリュバンと母親的女性伯爵夫人(『フィガロの結婚』によれば伯爵夫人はシェリュバンの代母であると同時に彼の両親の親戚でもある)に関連する宝石としてダイヤモンドが登場するが、『赤と黒』でも、母系的関係にあることが示唆されるジュリアンとレナール夫人(26, 92, 463等)に関わってダイヤモンドが現れる。まず、『罪ある母』においては、ダイヤモンドで飾られた伯爵夫人の腕輪の中には伯爵の肖像が入れているが、伯爵の計略によって、シェリュバンの肖像入りのものにすり替えられる(362-363)。そして、すり替えられた腕輪を見た伯爵夫人は、シェリュバンが自分を死へ招いていると思い、気絶する(416-417)。気絶する直前、彼女は、シェリュバンの肖像に向かって「あなたの言う通りにします……死にます」(417)と言う。そして、気絶した母を見て、死んだと思った息子レオンは、「ああ！お母さん、あなたを殺すのは私です！ c'est moi qui te donne la mort」(417)、「お母さんは死んだ！ああ！、お母さんだけを死なせはしません！」(418)と叫ぶ。レオン Léonの名は、シェリュバンの名前 Chérubin-Léon d'Astorga(369)から、シェリュバンの希望により、その一部を取ってつけられたもので(369)、生まれたのも父と同じ聖レオンの日(11月10日)で(349, 397)、しかもレオンはシェリュバンそっくりの容貌をしている(362)。さらにシェリュバンが死んだ日も

聖レオンの日である(349)。従って、Didier氏も指摘しているように⁸⁾、レオンはシェリュバンの生まれ変りとみなすことができ、レオンと母の関係には、明らかに、シェリュバンと伯爵夫人の母子相姦的關係が重ねられている。「スフィンクスの謎を解くか、さもなければむさぼり食われるか」(382)だと、フィガロがレオンに言う台詞も、レオン(=シェリュバン)=オイディプスを暗示するものである。かつて伯爵夫人とシェリュバンによって実行され、シェリュバン一人がその罪を負って死んだ母子相姦の罪と罰を、レオンと伯爵夫人の二人は、伯爵の目の前で、いわば模擬的に反復している。次に、『赤と黒』においては、レナール夫人に頼まれ、山の洞窟にジュリアンが隠した箱の中身の一つがダイヤモンドである(118, 151)。ジュリアンは処刑後この山の洞窟に葬られ、レナール夫人もジュリアンの死後三日目に死ぬ(488-489)。伯爵夫人は気絶するだけで死なず、夫婦・親子の和解が成立して、レオンは伯爵の隠し子フロレスティーヌと結婚することになるから、両作品の結末は大きく違うが、母親的女性と息子の男性の愛と死に関わる重要な小道具として、ダイヤモンドが使われている点は同じである。又、シェリュバンの後追い死の意味をもつ伯爵夫人の気絶は、ジュリアンの後を追うレナール夫人の死に、そして、母を殺すのは自分だ、自分も生きてはいないと叫ぶレオンは、レナール夫人を狙撃し、夫人が命を取り留めたことを知って、「レナール夫人を殺していたら、俺は死んでいたろう」(438)と考えるジュリアンに対応する。レオンは、気絶した母を介抱して、「ああ、神様、可哀想なお母さんを返して下さい！rends-moi ma malheureuse mère」(418)と祈り、その願いはかなえられるが、獄中で再会したレナール夫人の不在を悲しむジュリアンも、「偉大な神、善良な神、寛容な神よ、愛する者をお返し下さい！rends-moi celle que j'aime」(482)と祈り、彼の願いもかなえられる(483)。さらに、伯爵夫人と別れたシェリュバンは密かに手に入れた夫人の「一束の巻毛」(368)を、死の直前に彼女に送り返すが、レナール夫人もブザンソンに旅立つジュリアンに「自分の髪を毛を一房」(149)与えている。シェリュバンの生まれ変りレオンは、フランス革命とその反キリスト教思想を支持し(367, 420)、義務に決して背いたことがないが(413)、ジュリアンも、ルソー(20)、ヴォルテール(232)を愛読し、聖書を信じず(20)、ナポレオンを崇拜し(22, 23, 24, 60等)、革命史に夢中になり(283)、義務の観念を生きる支えとする(49, 51, 52, 73, 82等)。ジュリアンは革命に遅れて来たレオンである。

『罪ある母』と『赤と黒』の類似点はまだある。これまで取り上げた箇所は、共通するモチーフ・語句が、ほぼ同じような状況で、同じような人物に使われており、モデルとそれを基にした作品との対応関係は単純であった。しかし、次の場合はどうだろうか。アルマヴィーヴァ伯爵は妻の姦通の相手シェリュバンを「悪人 méchant homme」ではないと考えるが(369)、ラ・モール侯爵が「悪人 méchant homme」ではないと考えるのは(417)、娘マチルドの恋人ジュリアンである。しかし、伯爵夫人から彼女に会うことを禁じられたシェリュバンが「生きることは私には耐え難い la vie m'est odieuse」(368)と、彼女宛ての手紙に書くように、マチルド

との関係をラ・モール侯爵から責められるジュリアンも「ずっと前から、生きることは私には耐え難いのです Depuis longtemps la vie m'est insupportable」(418)と侯爵に手紙を書く。レオンは父の意向でマルタ騎士団員となり生涯独身を守ることを誓わされていたが(367, 414), フランス革命に触れて、その誓いを破棄することを考え(367, 370, 391), さらに、新しい祖国フランスの自由のために戦う兵士となろうとするが(420), ジュリアンは逆に軍人から聖職者へと志望を変える(22-23)。レオンの兄は決闘で死ぬが(384), ジュリアンは決闘後も生き残る(259)。レオンは、母が気絶した時、母を殺すのは自分だと思うが、レナール夫人は、末子スタニスラフが病気になると、「息子を殺すのは私です C'est moi qui tue mon fils」(108)と、息子を殺すのは自分だと思う。レオンとフロレスティーヌは、自分たちを腹違いの兄と妹だと誤解して近親相姦を恐れ、愛情を抑圧するが(379, 384), 姦通の罪におののくレナール夫人に、ただ兄弟として彼女を愛そうとジュリアンが言うと、ジュリアンを兄弟として愛することなどできないと夫人は答える(110)。「悪魔 diable」(372, 386, 403, さらに démon-390)に譬えられ、「怪物(人でなし) monstre」(421, 422, 423, 433)視されるのは、『罪ある母』では、伯爵の腹心で悪役のベジャルスだが、『赤と黒』では、ヴァルノら悪役だけでなく(33, 40等), 主人公のジュリアンとマチルドも、悪魔視(ジュリアン-309(ただし Méphistophélès), マチルド-285, 408(ただし démon))・怪物視(ジュリアン-404, 417, 429, マチルド-427)される。レオンも一度だけ「怪物」の語を自分に使うが(385), 怒りをぶつけたベジャルスに騙され、善人と誤解し、自分の非礼を詫げるために自虐的に使われるもので、レオンの怪物性は言葉の上だけのものである。また、『罪ある母』で伯爵夫人だけに与えられる天使的性格は、『赤と黒』では、レナール夫人だけではなくジュリアンにも与えられる(ange-15, 212, 388)。このように、類似のモチーフ・語句が、『罪ある母』と『赤と黒』で、違う状況、違う人物に使われていたり、順序や結果が反対になっている場合がある。これら対応関係が単純でないものについては、物語全体の構成・内容を踏まえて、第3章でもう一度取り上げる。そこで、最後に、『赤と黒』の題名と関連する『罪ある母』のある細部を取り上げて、この章を終えたい。

第4幕第6場で、伯爵夫人は、「赤と黒のドレス une robe rouge et noire」を身につけ、「同じ色の花束」(409)⁹⁾を持って現れる。夫人に命じられて花束を用意したシュザンヌによれば、赤と黒は「血と喪の色 couleurs du sang et du deuil」(349)である。「血」は戦場で死んだシェリュバンの血を、「喪」は、伯爵夫人がシェリュバンのために服する喪を意味している。この伯爵夫人のドレスと花束の色、そしてシュザンヌによるその解釈も、『赤と黒』の題名の由来とその意味に関する議論に参加する資格がある。『罪ある母』と対応させれば、題名の「赤」は、ギロチンによって処刑されるジュリアンの「血」の色を、「黒」はレナール夫人がジュリアンのために服する喪を意味することになる。実際に喪服を着てジュリアンを葬るのがレナール夫人でなくマチルドであることは、この解釈と矛盾しない。なぜなら、派手な葬式を行い、ジ

ジュリアンの墓所を飾り立てるマチルドではなく、ジュリアンの死後三日目に死ぬレナル夫人こそが、ジュリアンの真の喪に服する人物であることは明らかだから。ジュリアンの死の前にも、毎年、ボニファス・ド・ラ・モールのために命日に喪服を着るマチルドは、レオンと結ばれることなく、レオンとその母を死に至らしめるフロレスティーンである。

ポーマルシェの『フィガロの結婚』については、スタンダールは、『赤と黒』第1部第6章のエピグラフとして、モーツアルトのオペラの台詞の一部を引用し(26)、さらに、第1部第9章の本文中でも、モーツアルトの名を出し(49)、影響関係の存在を読者に暗示している。『罪ある母』については、エピグラフにも本文にも、そのようなものは一切ないが、それらに先立つ、作品の題名そのものが、注意深い読者への合図になっているのではないだろうか。

2 『罪ある母』と『アルマンズ』

息子レオンの父がシェリュバンであることを夫に隠している伯爵夫人にとって、シェリュバンとの姦通は常に重くのしかかる秘密であり、この秘密の露見と告白、そして夫婦の和解が、『罪ある母』の主な筋であるが、『罪ある母』にはもう一つの筋が存在する。伯爵夫人は、伯爵の代子(実は隠し子)で孤児のフロレスティーンと息子レオンとの恋を实らせようとするが、伯爵の腹心で悪漢のベジャルスが、フロレスティーンを横取りし、伯爵の財産を奪おうとする。この副筋は『赤と黒』とは関連が薄い¹⁰⁾。しかし、義務感が強く、啓蒙思想に親しみ、母親に保護される若い娘と結婚しようとするが、悪者のために邪魔される、レオンと同じ二十才の青年が、スタンダールの別の小説の中にもみつかると。スタンダールの処女長編小説『アルマンズ』のオクターヴがそれである。

ただし、オクターヴの母に伯爵夫人のような姦通経験はなく、そのため、『アルマンズ』には、母の姦通の罪と罰というテーマは、明確な形では存在しない。しかも、それに代わる他のテーマも導入されないから、もっぱら、オクターヴの結婚問題が作品の中心となる。『アルマンズ』は、『罪ある母』から、その副筋を借り、それを唯一の筋とすることによって作られた作品である。しかし、後で見るように、オクターヴと母の関係は、レオンと母の場合と同じように、濃厚に母子相姦的なものだから、その意味では、母子相姦のテーマは存在しないのではなく、母のお気に入りの娘と結婚しようとする息子の物語の背後に、隠されて、潜在的に存在している。そして、明確な筋として展開することのないこのテーマは、作品に大きな影を投げかけ、登場人物の運命に決定的な影響を及ぼすことになる。

さて、具体的に、『罪ある母』と『アルマンズ』の類似点を見ていこう。

どちらの作品でも、母は自分の気に入った娘を息子と結婚させようとするのだが、『アルマンズ』では、その娘は、母の遠縁の孤児であり¹¹⁾、『罪ある母』では父の代子で孤児となって

いるが(348, 351, 355, 370等), 実は父の私生児であり(384), いずれも, 縁戚ないし準縁戚的關係にある孤児である。そして, 息子がその娘と結婚する前から, 母親が娘を自分の子供扱いし, 二人の若者が兄妹のような関係に置かれる点も同じである(『罪ある母』-371, 381, 393, 400, 410, 426等, 『アルマンズ』-87, 121, 151等)。さらに, アルマンズもフロレスティーンも, オクターヴとレオンを愛しながら, 一度は, 財産も後ろ盾もない孤児の自分との不釣り合いな結婚を拒み, 修道院に入ることを考える(アルマンズ-66-68, フォロレスティーン-378, 390)。ただし, フロレスティーンの場合は, 不釣り合いな結婚よりも, 兄妹相姦を避けるためという理由の方が大きい。アルマンズに息子との結婚を提案したオクターヴの母は, アルマンズの様子がおかしいので, 「アルマンズと彼女の息子との間に何か奇妙なことが起こっている il se passait quelque chose d'étrange」(89)と思い, 『罪ある母』では, 二人の若者を始め, 家中の人々の様子がおかしいのを見て, シュザンヌが, 同じように, 「ここでは実に奇妙なことが起こっている il se passe ici des choses bien étranges」(390)と考える。

Didier 氏の書の中の『罪ある母』を論じた章のタイトル, 「喪, 罪責感, 近親相姦 Le deuil, la culpabilité, l'inceste」¹²⁾は, 『罪ある母』の中心テーマをみごとに要約しているが, 『アルマンズ』にも, 「喪」と「罪責感」と「近親相姦」の影は濃い。『罪ある母』と『赤と黒』に, 母親的女性と息子的男性にまつわるダイヤモンドが登場することを前章で述べたが, 『アルマンズ』にも母子相姦を象徴するダイヤモンドが存在する。自分のダイヤモンドを売って馬を買い, 息子オクターヴに与えるという母侯爵夫人の行為に, 母子相姦の欲望が隠されていることは明らかであろう(27)。息子オクターヴの性的不能の原因の一つが, この母子相姦的關係への固着にあることは, すでに Philippe Berthier 氏によって指摘されている¹³⁾。オクターヴの死後まもなく父侯爵が死ぬと, 母とアルマンズは同じ修道院に入り, オクターヴの「喪」に服するが(192), 『罪ある母』でも, シェリュバンの死の喪に服する伯爵夫人を, 伯爵は修道院に追いやる計画を立てており(356), すでに指摘したように, レオンとの兄妹相姦を避けるために, フロレスティーンも修道院に入ることを望む。『罪ある母』は, 『アルマンズ』と違って勸善懲悪のハッピーエンドとなるが, シェリュバンの肖像を見て気絶した母を見たレオンは, 母の死の責任は自分にある, 母が死んだら自分も生きてはいないと叫ぶ。ベジャルスの陰謀が暴かれるその後の展開がなければ, 『罪ある母』は, 『アルマンズ』と同じように, 主人公とその愛する女性たちの, 死や隠遁で終わる悲劇的な結末を迎えた筈である。母の姦通が明らかになったとき, レオンは, 「修道院に母は隠遁し(……), 一兵卒となって, 私は, 新しい祖国の自由を守ります。祖国のために無名で死ぬか, あるいは, 熱烈な市民として, 祖国に仕えましょう」(420)と伯爵に語る。『アルマンズ』の結末の, ギリシャ独立戦争に参加すると偽って船出したオクターヴが船上で自殺すると, アルマンズとともに母侯爵夫人が修道院に入るという展開の出発点は, このレオンの台詞にあるのではないだろうか。全体の構成に応じて細部は変えられているが,

基本的な流れは同じである。さらに、伯爵の命令でマルタ騎士団に入団して生涯独身を守ることになっていたレオンが、革命思想の影響で、独身の誓いを放棄しようとするように、修道僧になることを考えていたオクターヴも、啓蒙思想を知って考えを変える(26)。レオンが「決して義務に背いたことがな」(413)のように、オクターヴも「義務の化身」(24)である。

『アルマンズ』と『罪ある母』に共通する最も印象的な細部を見よう。決闘で重傷を負ったオクターヴは、アルマンズ宛の手紙を自分の血で書き(133)、さらに読んだあとすぐに燃やすようにアルマンズに命じ(134)、アルマンズは指示に従う(138)。戦場で瀕死の重傷を負ったシェリュバンも、伯爵夫人宛の最後の手紙を自分の血で書き、夫人は長い間保存していたこの手紙を、ベジャルスの企みで燃やさねばならなくなる。ただし、手紙はすでに、同じくベジャルスの企みで夫伯爵の手に渡っており、夫人に代わってベジャルスが火に投ずる手紙の束には、肝心の血で書かれた手紙は含まれていないから、燃やしたと思うのは夫人の誤解で、後に、すり替えられた腕輪とともに、この手紙も夫から見せられ、夫人は錯乱し、気絶することになる。しかし、手紙を燃やす場面での夫人の言葉に注目すると、夫人は、「では、あの人の唯一の形見を燃やさねばならないのか *faut-il donc brûler tout ce qui me reste de lui?*」(397)と語る。そして、アルマンズについても、語り手は、「だから、オクターヴの唯一の形見となるかもしれないものを手ばなさなければならぬ *il fallait donc se séparer de tout ce qui lui resterait d'Octave*」(138)と述べる。さらに、アルマンズにとっても(138)、伯爵夫人にとっても(397)、恋人の手紙を燃やすことは、辛い「犠牲 *sacrifice*」である。オクターヴは傷から回復するが、シェリュバンは死に、『罪ある母』では、燃やされなかった手紙が後で重要な役目を果たすから、周辺状況に違いはあるが、死の直前に恋人が自らの血で書いた手紙を犠牲として燃やさねばならない、というモチーフの中心は両作品に共通し、しかも、引用した部分は、語句の細部まで良く似ている。オクターヴとアルマンズの関係の背後には、母子相姦の関係にある二つのカップルが、すなわち、シェリュバン(=レオン)と伯爵夫人、オクターヴと侯爵夫人の二組のカップルが隠されており、アルマンズはオクターヴにとって、母の代理にすぎないのではないだろうか。この問題は次章でさらに詳しく検討する。

さて、作品の構成の面においても、『アルマンズ』は、町民劇 *drame bourgeois* である『罪ある母』に大きく影響されている。町民劇と小説 *roman* の近縁性・相互浸透は、Didier 氏によっても指摘されているが¹⁴⁾、舞台をパリとその周辺のサロンにほぼ固定し、家族と愛の問題を中心テーマとし、悪漢の陰謀が筋の展開に重要な役割を果たす『アルマンズ』は、町民劇の世界をそのまま小説という器に移し入れたものとみなすことができる。町民劇との相違点は、同時代の生々しい政治的事件が(貴族賠償法、ギリシャ独立戦争等々)、物語の筋と密接に関係する形で導入されていることだが、『罪ある母』においても、舞台は1790年11月10日の聖レオンの日のパリと明確に指定され(348-349)、革命のもたらした新しい状況が登場人物、特にレオ

ンの行動に反映しているから、この要素も、町民劇に全く欠けていたわけではない。従って、スタンダールは、町民劇を小説化するにあたって、町民劇が萌芽的に持っていた同時代の政治的・社会的テーマの作品への導入を拡大・発展させたと言いきださる。しかし、オクターヴという非行動的人物を主人公にした『アルマンズ』においては、作者は、この試みを十全に展開することはできなかった。『アルマンズ』では不十分な形でしか表現できなかった同時代の歴史・社会批判のテーマを、家族と愛のテーマと拮抗するところまで拡大し、同時に、登場人物の善玉と悪玉への単純な二極化、陰謀やお誂え向きの偶然といった町民劇以来の不自然な劇的要素をできる限り抑えて、人物に複雑な陰影を与えること、これが『赤と黒』でスタンダールが目指したものと考えられる。ただし、町民劇に特徴的な手法は、『赤と黒』においても決して全面的に排除されてはいない。抑制されてはいるが、小説の重要な技法として保存され、効果的に使われている。これは、後のスタンダール小説でも変わらない。

3 『罪ある母』・『アルマンズ』・『赤と黒』

『アルマンズ』から『赤と黒』へのスタンダール小説の展開を、町民劇の小説化の深化・発展という視点から考えると、第1章で指摘した、『罪ある母』と『赤と黒』で類似のモチーフ・語句が異なった使われ方をする問題は、どのように考えられるだろうか。

ところで、『罪ある母』と『アルマンズ』についても、共通するモチーフ・語句の対応関係が単純ではない場合がある。『罪ある母』では、脇役で悪玉のベジャルスに「悪魔」と「怪物」の両方の語が使われるが、『アルマンズ』では主役で善玉のオクターヴに、それらの語が使われる(24(ただしdiableではなくLucifer), monstre-177, 178, 180)。すでに指摘したように、『罪ある母』の善玉レオンについても、一度だけ、「怪物」(385)の語が登場するが、それは言葉の上だけのことで、レオンに怪物的性格はなく、彼はあくまで善人であり、当然、悪魔視されることもない。『罪ある母』では、天使的性格が伯爵夫人だけに与えられているのに対して、『アルマンズ』ではオクターヴとアルマンズの二人に与えられている(deux anges-53)。またレオンとフロレスティエヌは兄妹の近親相姦の罪に怯え(379, 384)、フロレスティエヌはレオンを兄としてしか愛さないと言うが(380)、アルマンズは自分はオクターヴにとって妹のような存在でしかないと悲観する(106)。『罪ある母』では、伯爵夫人は自分の姦通の罪の罰が息子たちに下されることを恐れるのに対して(決闘で死んだ長男はすでにその罰を受けた)、オクターヴの母は、息子が啓蒙思想家の著作を読んでいることに対して神の罰が下ることを恐れる(28)。

『罪ある母』において、脇役で悪役のベジャルスに与えられている悪魔的性格が、『アルマンズ』では主人公のオクターヴに、さらに『赤と黒』では、主人公のジュリアンだけではなくマチルドにも与えられていること、また、『罪ある母』では伯爵夫人にのみ与えられている天

使的性格が、『アルマンズ』ではオクターヴとアルマンズに、『赤と黒』ではジュリアンとレナール夫人に与えられていること、これらは、主要な登場人物の性格の複雑化が、『罪ある母』

『アルマンズ』 『赤と黒』の順に進んでいったことを示している。オクターヴとジュリアンは、ひたすら善良なレオンと違って、悪魔的・怪物的性格と天使的性格の両方を合わせ持っている。しかし、非行動的なオクターヴの「メシア」(24)と悪魔の二面性は、両極の間の緊張感に欠けた、静的なものでしかなく、特に悪魔性の展開は不十分である。ベジャルスの強烈な悪魔性は、ジュリアンによって始めて、善なる主人公の内に取り入れられ、ダイナミックな形で生かされた。「恩人の手に噛み付こうとしている蛇」(404)、偽善者ベジャルスは度々タルチュフに瞥えられるが(350, 375, 403)、ジュリアンも偽善者であり、自分のモデルがタルチュフであることを自覚し(309, 417-418)、恩人ラ・モール侯爵を裏切る自分を蛇に譬える(445)。『赤と黒』でタルチュフの名が最初に登場するのは、マチルドから愛の告白の手紙を渡されて、ジュリアンが「喜びを押さえられない」(308)という場面だが、この場面のジュリアンのモデルは、計画成功を目前にして興奮し、「俺の心を満たす、いまいましい喜びよ、お前は自制できないのか」と独白するベジャルスであろう(405)。次に、男性主人公を取り巻く女性たちに注目すると、レオンは、フロレスティーヌと天使的な母伯爵夫人を愛し、オクターヴは、母伯爵夫人と天使的なアルマンズを愛する。フロレスティーヌと侯爵夫人には天使の語は使われていないが、後で論じるように、フロレスティーヌは伯爵夫人の、アルマンズは侯爵夫人の代理的存在だから、いずれか一方が天使化されれば、もう一方も天使化される。レオンもオクターヴも、結局、年齢は違うが、いずれも天使的な二人、いや一人の女性だけを愛していることになる。ジュリアンは違う。天使的なレナール夫人と、夫人とは正反対の性格を持つ悪魔的なマチルドの両方を、すなわち、二人の、明確に区別された女性を愛する。

ところで、悪玉ベジャルスは、一時は伯爵家の人々全員を騙すことに成功する。特に、伯爵夫人は、彼を神の代弁者とみなし(396)、さらには、一度だけだが、「天から遣わされた天使」(409)と呼ぶ。ベジャルスを「悪魔 *démon*」に譬えるシュザンヌの台詞の中でも、同時に彼は「神 *dieu*」に譬えられている(390)。もちろん、これは、レオンが自分を怪物視する場面と同じで、悪人ベジャルスの天使的性格も、あくまで言葉の上だけのものであり、ベジャルスは、どこまでも悪魔的な悪玉である。しかし、たとえ言葉の上だけにせよ、ベジャルスに「天使」の語が、レオンに「怪物」の語が使われていることは、彼らを出発点にして、オクターヴやジュリアンのような、悪魔と天使の両方の面を持った複雑な性格の主人公を生み出すことができることを、スタンダールに示唆したと思われる。彼らの持っている副次的な性格を拡大して、主要な性格と対抗させること、あるいは、悪なるベジャルスと善なるレオンを合体させること、そうすれば、新しい主人公を作り出すことができる、そうスタンダールは考えたのではないだろうか。ベジャルスが伯爵の秘書で、伯爵の使者役を務めたことがあるとされている点は(352)、

ジュリアンがラ・モール侯爵の秘書となり、ロンドンに派遣されることや(264)、密書の陰謀における彼の役割に生かされていると思われるし、レオンとの決闘を拒否して、「友人の息子を殺す」わけにいかぬと言うベジャルスは(384)、ラ・モール侯爵の息子ノルベールとの決闘を拒否して、「恩人の息子を撃つたり」(419)しないと言うジュリアンを思わせる。また、レオンが革命の影響を受けて、その貴族的性格を放棄していき(368)、マルタ騎士団の「騎士chevalier」(357, 389)の資格も捨てるのに対して、ジュリアンは逆に平民性を徐々に失って、犯行直前には「ド・ラ・ヴェルネ騎士」(426)となるが、これは、革命の最中に生きるレオンを反転した像が、王政復古という反動的な時代を生きるジュリアンのモデルになっていることを示している。

次に、レオンとオクターヴが、ともに啓蒙思想によって聖職者志望を捨てるのに対して、同じ思想を共有しつつジュリアンが聖職者になろうとすることはどう考えたら良いだろうか。まず、レオンとオクターヴを比べると、ともに聖職者志望を捨てるところまでは同じだが、レオンは革命に参加しようとするのに対して、オクターヴは王政復古下の現実に全く関わろうとしないから(ギリシャ独立戦争への参加は自殺の旅の口実には過ぎない)、同時代の現実への関わりという観点からは、オクターヴはレオンより退化している。また、レオンの革命参加も、具体的には革命派の集会に参加したことが語られているだけであり(367)、物語の背景にとどまっている。それに対して、『アルマンズ』とほぼ同時代を扱っている『赤と黒』の主人公ジュリアンは、レオンやオクターヴと同一の思想を持ちながら、王政復古時代の現実に適応するために、軍人志望から聖職者志望へと転向し、現実に積極的に関わっていく。その結果、政治的・社会的テーマの作品中での比重が、『赤と黒』においては著しく増大し、ジュリアンとレナール夫人、ジュリアンとマチルドの恋愛には、同時代の政治的・社会的問題が絶えず介入してくる。政治的・社会的テーマと愛のテーマは、作品中で、見事に拮抗している。オクターヴが貴族の子弟であったのに対して、ジュリアンという平民出身の野心家を主人公に選んだことが、それに大きく貢献したことは言うまでもない。そして、主人公が自らの出身に近い人物であることは、作者自身の現実体験を作品中に大きく反映させることも可能にした。

さて、家族と愛の問題に関する細部の類似と異同については、スタンダールと彼の母との関係を考慮に入れる必要がある。

スタンダールは、晩年の自伝『アンリ・ブリュールの生涯』の中で、七才の時に産褥に死んだ母に対して、近親相関的な愛を抱いていたことを告白している¹⁵⁾。代母である伯爵夫人と代子シェリュバンが姦通し、二人の間にシェリュバンそっくりの息子レオンが生まれるという『罪ある母』の設定は、『フィガロの結婚』以上に大きな衝撃を彼に与えた筈である。代母と代子という形でカムフラージュされているが、シェリュバンは、スタンダールには、自らも抱いた母子相姦の願望を実現し、そのために死ななければならなかった人物と見えたに違いない。

しかも、シェリユバンそっくりのレオンとその母伯爵夫人との関係もまた母子相姦的であった。しかし、ポーマルシェの時代には、『オイディプス王』のような古典古代の作品をリメイクする場合以外に、劇場の舞台に本当の母子相姦を登場させることは不可能だったから、現実に母子関係にあるレオンと伯爵夫人の間に母子相姦は実現せず、レオンは、父の私生児であるフロレスティーヌを愛し結婚する。ただし、その前に、二人は互いに相手を兄妹だと誤解し、兄妹相姦の禁忌に怯える。この兄妹相姦の禁忌は、Didier氏も指摘しているように、すでに伯爵夫人とシェリユバンによって破られた、そして潜在的に伯爵夫人とレオンと間に存在する、母子相姦の禁忌の代替物と考えられる¹⁶⁾。従って、フロレスティーヌは、伯爵夫人の代理的存在である。しかし、伯爵と伯爵夫人が互いの姦通を許し合い、二人の若者が全く血縁関係にないことが明らかになり(435)、兄妹相姦の禁忌が消滅すると、同時にレオンと伯爵夫人の間に潜在していた母子相姦の禁忌も解消し、レオンは母から解放され、フロレスティーヌも母の代理的存在から脱皮して、二人は結婚する。この結末は、しかし、母への執着と母からの離脱という相反する願望に折り合いをつけるために生涯苦しんだスタンダールには、受け入れることはできなかった。

母親の被保護者である若い娘を愛する息子という設定は、『罪ある母』と『アルマンズ』に共通するが、相違点に注目してみよう。オクターヴはマリヴェール侯爵と侯爵夫人の一人息子であって、レオンのように母が姦通によって生んだ子ではない。そして、オクターヴの愛情はもっぱら母のほうに向けられており、レオンの兄のような異父の子を持たぬ母も、その愛情をひたすらオクターヴに注いでいる。伯爵夫人とレオンの関係と比べても、オクターヴとその母の関係は、はるかに濃密なものである(23, 29)。又、アルマンズはマリヴェール侯爵夫人の遠縁の女性であって、フロレスティーヌのようにアルマヴィーヴァ伯爵の私生児ではない。フロレスティーヌが母の縁者ではなく、父の隠し子であることは、フロレスティーヌが、独立した人格として伯爵夫人から分離することを助け、アルマンズが母方の縁者であることは、逆に、アルマンズとオクターヴの母子関係と、アルマンズとオクターヴの兄妹的關係を強化する。オクターヴとアルマンズの二人は、実の兄妹ではないから、兄妹相姦の禁忌に怯える必要はないが、兄妹的關係から離脱して、男女関係に飛躍できないことに悩まねばならない。いや、悩むのは、オクターヴが自分を妹としか見ていないと嘆くアルマンズだけである。オクターヴにとっては、アルマンズとの関係を兄妹的關係にとどめておくことは、母との母子相姦的關係を維持するために必要なことであり、オクターヴは、母親とアルマンズの二人の女性にかしずかれた、この居心地のいい状態に満足している。もちろん、このままでは物語は停滞し、展開しないから、伯爵夫人がフロレスティーヌとレオンを結婚させようとするように、アルマンズと息子をマリヴェール夫人は結婚させようとする。しかし、レオンとフロレスティーヌが、レオンの母の不倫の発覚という劇的な形で、近親相姦の禁忌から解放されて結婚を成就させるのに

対して、強い絆で結ばれたオクターヴと母の関係を切断する力は、母の影のような存在でしかないアルマンズには無い。母子相姦を象徴するダイヤモンドがアルマンズの持ち物としても登場し(「ダイヤモンドの十字架」(118)), しかも、それがアルマンズの母に由来するものであることは(150)、彼女が母マリヴェール夫人の代理に過ぎないことの傍証の一つである¹⁷⁾。オクターヴは、アルマンズへの愛から、一度は母への愛を忘れるが(114, 128)、この母との分離は長続きしない。オクターヴとアルマンズの間は、男女の関係として常に不安定で、決定的に兄妹的關係を離脱することがない。オクターヴは、深夜自分の部屋に近づいたアルマンズが伯父スーピラーヌに見られるという偶然の危機の力を借りて、彼女との結婚に踏み切ろうとするが、二人の悪玉、スーピラーヌとボニヴェ騎士の陰謀に騙され、アルマンズの愛を失ったと思い、しかし、アルマンズへの愛は失わず、人生に絶望して自殺する。そして、オクターヴの死後、アルマンズと母は同じ修道院に入る。修道院は現世の拒否、生きながらの死と考えられるから、三人は死の中で一体化したとみなすことができる。オクターヴの母とアルマンズは、結局同一人の母の二つの現れに過ぎず、生においても、死においても、オクターヴは、二人の母によって囲われた空間を出ることができなかった。オクターヴの死を導くきっかけとなる偶然の危機と陰謀には、死の中でオクターヴと母を結び付けようとする作者の無意識の願望が隠されている。

しかし、スタンダールは、一体なぜ、オクターヴとアルマンズの結婚を拒否しただけではなく、オクターヴに母親の代理に過ぎないアルマンズと恋をさせ、しかもそれを失敗させるという、手の込んだことをしたのだろうか。また、なぜ、ダイヤモンドと馬のエピソードで、隠喩的に母親の母子相姦の願望を暗示するだけで、オクターヴと母に母子相姦を実行させなかったのだろうか。サドの作品のように露骨に近親相姦の場面を描くのは論外としても、様々に緩和された形で、小説中で母子相姦を実現するのは、技術的には、決して不可能ではなかった筈である。『アルマンズ』は小説だから、劇である『罪ある母』のように検閲と公衆を考慮する必要はなかったし、その『罪ある母』でさえ、シェリュバンと伯爵夫人の姦通という、カムフラージュされた形で、母子相姦を作品中で実現させている。なぜ、オクターヴの母は二重化して、二人の女となり、しかも、結局同一人の母でしかなかったのだろうか。

七才の時に母を失ったスタンダールに、もちろん現実の母子相姦は起こらなかった。しかし、母が死に、未遂に終わったからこそ、母子相姦願望は執拗にスタンダールを捕らえて離さなかった。母親への執着と母親からの離脱の願望を同時に実現させること、すなわち、母子相姦願望を捨てることなく、母以外の女を愛するという、スタンダールが抱え込んだ難問を、小説中で最初に背負わされた人物がオクターヴである。オクターヴは、愛情深い理想的な父母と彼によって構成される核家族の一人息子であり、その状況では、母子相姦の禁忌は最も負荷が重いと考えられる。『罪ある母』のレオンには、母子相姦の罪を償ってすでに死んだ異父兄がいる。

そして、レオンはシェリュバンの生まれ変わりだが、そのことは、逆に、彼にかかる母子相姦の禁忌の負荷を軽くしている。軽いからこそ、その解消も容易い。それに対して、もしオクターヴが、隠喩的レベルを越えて、実際に母子相姦の罪を犯そうとしたら、彼は、愛情深い父を裏切り、家族を破壊する大罪を犯すことになり、しかもその罪を一人で負わねばならない。乗り越えなければならぬハードルは高く、明らかにオクターヴにそのエネルギーは与えられていない。そして、オクターヴの家族をそのように設定した作者にも、母親への執着と母親からの離脱の問題を突き詰める勇氣はなかった。オクターヴは、母から離脱もしなければ、母への愛を成就することもない。母以外の女性を愛して、母と対立することも、もちろんない。母と母の影でしかない女性の間を浮遊するだけだ。オクターヴと母とは、Jean Bellemin-Noël氏が指摘しているように、幼児的な母子共生の段階にとどめられている¹⁸⁾。オクターヴの自殺は、中途半端な母子相姦願望者にふさわしいものである。母子相姦を実行したシェリュバンは、兵士となり自殺的突撃によって死ぬのに対して(368-369)、オクターヴは、ギリシャ独立戦争に参加すると偽って船出し、船上で、アルマンスを(従って同時に母を)愛しながら、自殺する(190-192)。

『赤と黒』のジュリアンとレナール夫人は、たびたび母子に譬えられるが、現実には全く赤の他人である。代母と代子の関係だった伯爵夫人とシェリュバン、実の母子だったマリヴェール侯爵夫人とオクターヴと比べて、母子相姦の禁忌から最も遠く、そのため、二人は性的な関係を結ぶことができる。ジュリアンは有夫の女性との姦通の罪を負うだけであり、それだけでは、姦通と母子相姦の二重の罪を背負ったシェリュバンのように、死ぬ必要はない。レオンの異父兄は、シェリュバンの罪のせいで死ぬが、レナール夫人の末子スタニスラスは病気になるだけである。さらに、ジュリアンは、もう一人、血縁関係も姻戚関係もない女性マチルドを恋人にする。男性が、性愛の対象を、年上の母親の女性から、自分と同世代の若い女性へ移行させるこの展開は、『罪ある母』の場合は、シェリュバンと伯爵夫人の恋から、レオンとフロスティエヌの恋へと、別のカップルの形で行われる。ただし、レオンはシェリュバンの生まれ変わりだから、カップルの男性の方は、実は同一人物であり、一人の男性の性愛の成長過程を表しているとみなすことができる。母と相姦し、一旦死んだシェリュバンは、生まれ変わって、同世代の女性と結婚する。『アルマンス』においても、オクターヴと母、オクターヴとアルマンスという二つのカップルが存在したが、母と相姦せず、母から離れることもできないオクターヴは、母からアルマンスへの移行に失敗した。いや、もともと母とアルマンスは別の者ではなく、移行自体が目論まれていなかった。『赤と黒』では、この移行は一旦は成功し、オクターヴ同様決闘に生き残ったジュリアンは、やがてマチルドを征服し、ラ・モール侯爵は、ジュリアンを「悪人」ではないと考え、マチルドとの縁談が進行する。しかし、なぜか、伯爵夫人に遠ざけられたシェリュバン同様、ジュリアンも「ずっと前から、生きることは私には耐え難

い」と思い、やがてレナール夫人にマチルドとの結婚を妨害されて、夫人を狙撃し、逮捕後、マチルドへの愛から醒め、母親的女性レナール夫人への愛に復帰する。ジュリアンの処刑死とその三日後のレナール夫人の死は、二人の愛が死によってのみ成就することを意味している。アルマンスとオクターヴは、オクターヴの母に庇護される天使的な性格を共有する兄妹的存在であった。ジュリアンとマチルドもまた、互いに良く似た性格を与えられているが、彼らの共通性は、天使とは反対の、傲慢な、悪魔的性格である。それに対して、レナール夫人には、『罪ある母』の伯爵夫人と共通する天使的な性格を与えられている。非行動的なオクターヴは自分の中の悪魔的な性格を発展させることができず、母とアルマンスにしか好意を向けることができないが、ジュリアンは、自分の中の二つの面を使って、レナール夫人とマチルドの両方と関係をつづることができる。スタンダールは、『アルマンス』では不可能だった、自らの母子相姦願望のフィクションによる実現を、『赤と黒』では、ジュリアンとレナール夫人という、赤の他人だが、母親的性格と息子的性格を与えられたカップルによって果たし、同時に、マチルドという、『罪ある母』にも『アルマンス』にも登場しない悪魔的な女性を創造することによって、ジュリアンに一旦は母親離れを行わせた。しかし、この母親離れは、ジュリアンを満足させない。レナール夫人から離れたジュリアンにとって「生きることは耐え難い」。レナール夫人の結婚妨害、ジュリアンのレナール夫人狙撃と殺人未遂（母親殺しの未遂）、そして夫人に対する愛への復帰という物語の展開は、女性像の極端な二極化による母親離れが、結局失敗に終わるしかないことを意味している。そして、母親的女性に復帰する以上は、シェリユバンと同じように、母子相姦の罪を償うために、ジュリアンは死なねばならない。裁判での発言で、ジュリアンはレナール夫人を改めて母として認め、夫人との恋が、単なる姦通ではなく、母子相姦であったことを明らかにしている(463)。作者は、ジュリアンを死に導くために、様々な口実を設けて、ジュリアンに死刑を免れる機会を失わせる(438, 483)。そして、母と女の両方の役割をジュリアンに対して果たし、他の女からジュリアンを取り戻したレナール夫人も、彼と共に死なねばならない。『罪ある母』の伯爵夫人は、レオンをフロレスティヌと結婚させることで、母子相姦の輪を断ち切り、生き延びるが、レナール夫人は、ジュリアンを兄弟のように愛することを拒否し、マチルドから奪い返すことによって、一旦切られた母子相姦の輪を再びつなぎ、ジュリアンと自分に死の罰をもたらす。「母子相姦願望を捨てることなく、母以外の女を愛する」という難問は、もちろん解決されなかった。しかし、作者が、『アルマンス』におけるように最初から戦いを放棄することなく、正面から難問に挑んだことは確かである。

ともあれ、『アルマンス』では幼児的な母子共生の段階にとどめられて未遂に終わった母子相姦の願望を、『赤と黒』において、作者はついに実現した。『罪ある母』の「喪」と「罪責感」と「近親相姦」に衝撃を受けた作者は、この作品から多くのモチーフ・語句を借りて、『アル

マンズ』と『赤と黒』に生かしたが、いずれの作品においても、母子相姦の禁忌の解消とハッピーエンドを拒否し、自らの死せる母への固着に殉じたと言えよう。

1802-4年の日記・文学日記の『罪ある母』に関する記述によれば、スタンダールは、『罪ある母』の倫理性を高く評価し¹⁹⁾、自作の劇『二人の男』の手本の一つと考えていた²⁰⁾。しかし、その後、1806年3月18日の日記の観劇の感想では、『罪ある母』に手厳しい評価を下し、「会話」と「感情」の「誇張」と「虚栄」を攻撃している²¹⁾。従って、スタンダールが、『罪ある母』を常に全面的に優れた作品として評価していたわけではない。しかし、『罪ある母』の倫理性については、後年の『ルニヤールの倫理性について』でも評価を変えていないから²²⁾、この作品に彼が一貫して大きな関心を抱き続けたことは確かである。たとえ「誇張」と「虚栄」に覆われた作品であっても、その内容は彼の心を深くとらえて離さなかった。その影響は『アルマンズ』と『赤と黒』に歴然としている。

ところで、「母子相姦願望を捨てることなく、母以外の女を愛する」という、『赤と黒』でも解決されなかった難問に、スタンダールは、もう一度、『パルムの僧院』において挑むことになる。しかし、もはや、そこには『罪ある母』の影は薄く、紙幅も尽きたので、この問題については、稿を改めて論じることとしたい。また、上記の戯曲『二人の男』に関しては、その『アルマンズ』との関連が、松原雅典氏を始め、何人かの研究者によってすでに取り上げられているが、いずれの論者も『二人の男』と『罪ある母』との関連を論じていない²³⁾。ところが、管見によれば、『二人の男』と『罪ある母』には、幾つか共通点がある。例えば、『二人の男』でも、主人公シャルルの母親は息子を熱愛しており、しかも、息子は親戚の若い女性に恋をする。そして、シャルルも啓蒙哲学と革命の支持者である。母親が息子の恋を徹底的に妨害しようとする点が大いなる違いだが、『罪ある母』の伯爵夫人も、一度は、ベジャルスに騙され、自分の秘密を守るために、息子レオンとフロレスティーヌを別れさせようとするし(394)、『二人の男』の母親も、最後には、息子の恋を受け入れる。帝政成立直前の1803年のフランスを舞台にした『二人の男』は、構成、内容いずれの点からみても町民劇的である。スタンダールは、『アルマンズ』によって町民劇を小説化する前に、町民劇そのものを試みていた。従って、この論稿で設定した、『罪ある母』『アルマンズ』『赤と黒』という流れは、『罪ある母』『二人の男』『アルマンズ』『赤と黒』という形に訂正する必要がある。この問題についても、いずれ稿を改めて論じたい。

注

- 1) 『赤と黒』の解剖学』, 朝日選書447, 朝日新聞社, 1992年。
- 2) Béatrice Didier, *Beaumarchais ou la passion du drame*, PUF, 1994.
- 3) これは、Didier氏が高名なスタンダール研究者でもあることを考えると、いささか不可解なことである。しかし、『フィガロの結婚』の『赤と黒』への影響についても氏は全く触れていないから、ポーマルシェの「ドラマの情熱」という氏の著作の主題に集中するために、あえて言及を避けたのかもかもしれない。とはいえ、『罪ある母』を取り上げたスタンダール研究が今のところ存在しないという状況に変わりはない。
- 4) Beaumarchais, *La Mère coupable*, dans *Théâtre de Beaumarchais*, Classiques Garnier, 1985, p.368. 以下『罪ある母』についてはこの版を使い、本文中に頁数を記す。
- 5) Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, Classiques Garnier, 1977, p.82. 以下『赤と黒』についてはこの版を使い、本文中に頁数を記す。
- 6) Béatrice Didier, ouv. cité, p.167.
- 7) 拙論「『赤と黒』とラシーヌの『フェードル』」(立命館文学第551号, 1997年11月)で論じたが、『赤と黒』にはラシーヌの『フェードル』の影響も見られる。
- 8) Béatrice Didier, ouv. cité, p.154-155. ベジャルスも伯爵夫人に「今やあなたにとって彼に代わるこのご子息」(397)と語る。
- 9) 花束は、劇冒頭の夫人のシュザンヌへの指示の言葉では、「真ん中に一本だけ白いカーネーションを置いた、黒い花と濃い赤の花の花束」となっており、シュザンヌは、さらに、夫人の希望で、黒い布で花束をくくる(349)。Didier氏によれば、「白」は、伝統的に、早世した子供の墓に母親によって供えられる花の色であり、「白いカーネーション」はシェリユバン(=レオン)を意味する(前掲書, p.156)。
- 10) 関連は薄いだけで、無縁ではない。ラ・モール侯爵は、ジュリアンが財産目当てにマチルドを誘惑したのではないかと疑い、レナール夫人からの手紙でそのことを確信して、二人の結婚を破談にする。従って、ベジャルスは明らかにジュリアンのモデルの一人である。ベジャルスとジュリアンの関連については後述。
- 11) Stendhal, *Armance*, GARNIER-FLAMMARION, 1967, p.34. 以下『アルマンズ』についてはこの版を使い、本文中に頁数を記す。
- 12) Béatrice Didier, ouv. cité, p.145.
- 13) Philippe Berthier, *Stendhal et la Sainte Famille*, Genève, Droz, 1983, p.147.
- 14) Béatrice Didier, ouv. cité, p.198-199.
- 15) Stendhal, *Vie de Henry-Brulard*, dans *Œuvres intimes*, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1982, p.555-556.
- 16) Béatrice Didier, ouv. cité, p.157.
- 17) Cf. Philippe Berthier, ouv. cité, p.148-151.
- 18) Jean Bellemin-Noël, *L'auteur encombrant: Stendhal/Armance*, Lille, Presses Universitaires de Lille, 1985, pp.20, 56-57, 82-83.
- 19) Stendhal, *Journal I*, *Œuvres complètes de Stendhal*, Cercle du Bibliophile, t.28, p.87.
- 20) Stendhal, *Journal littéraire I*, *Œuvres complètes de Stendhal*, Cercle du Bibliophile, t.33, pp.15, 216.
- 21) Stendhal, *Journal II*, *Œuvres complètes de Stendhal*, Cercle du Bibliophile, t.29, p.165.
- 22) Stendhal, *De la moralité de Regnard*, dans *Racine et Shakespeare*, *Œuvres complètes de Stendhal*, Cercle

ポーマルシェの『罪ある母』とスタンダール(下川)

du Bibliophile, t.37, p.235. ヴィレールに関する文中の記述(p.239)から1823年5月頃の執筆と思われる。

23) 例えば, 松原雅典『*Armance*の成立について』, 金沢大学教養部論集・人文科学編5(1967年)や Yoshitaka UCHIDA, *L'Enigme onomastique et la création romanesque dans "Armance"*, Genève, Droz, 1987, p.39-68等。

(Shigeru Shimokawa, 本学文学部教授)